

(第一課題の補足資料：23.1.18)

創世記 1:1-2:4 は、詩形による物語であり、恐らく祭儀において用いられるために形成されたものであろう。つまり、捕囚民の共同体に対して語られた祭司伝承である。それは、カオス（混沌）との神の対立から出発して（1:2）、秩序の平静であり得る天地万物に対する神の穏やかで喜びにあふれた支配へと、ドラマチックな仕方で、また広大な視野で展開して行く。

(a) まず、このテキストが科学的叙述ではなく、神学的主張であると理解すべきである。

つまり、科学的な、また即物的な記録は、このテキストと聖書の世界からはなれたのである。だから、信仰者は、聖書の字義とおりの解釈に関心をもっているのではなく、むしろ福音を聞くことにのみ関心をもっている。

だから、ここでなされている主張は、歴史的主張ではなく神学的主張であり、それは、神がお造りになった世界と結び合わされた神の特質についての、また、その神と結び合わされた世界についてである。

(b) このテキストを解釈する中で、聴く共同体は、それ自体の告白と賛美の言葉を語らなければならない。

(c) このテキストはさらに、創造は、創造主と被造物にとっての楽しみと喜びの源であることを宣言している（詩編 104:26 参照）。

### 礼拝祭儀の方法

礼拝祭儀は、神の支配についての最初の主張（1:1）から、神の作業の静かな完成（2:1-4a）へと進んでいく。しかも、無からの創造とカオスからの創造という、まさにそのあいまいさが、釈義上の可能性を豊富にする。

また、1:3-25 の長い礼拝式文の部分は、五日間の創造の業を包括している。また、構造は、対称を持っている。

時 「夕べがあり、朝があった。」

命令「神は言われた『・・・あれ』。」

実施「そのようになった。」

評価「見よ、それは極めて良かった。」

時 「夕べがあり、朝があった。」

この礼拝式文の「時」で前後をくくられている形式それ自体が、神の静かな支配の下に創造された世界の、目的にかなった秩序について解説している。

また、修辭的形式は、その中心的要素として命令と実施の展開をもっている。